

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 課給省 (特別換承誌)
昭和四十四年十二月二十五日 印刷 昭和四十二日 五二号
日 発行

第三十三卷 第



天地長春

知恩院の
松
石
名



天地長春

岸 信宏

(知恩院門跡)

東京の清雅堂の刊行で、藤原楚水氏の増訂になる『墨場必携』の中の四言対句を集めた内に「乾坤清泰、天地長春」という句が出ている。出典をあげていないが私の好きな句の一つで、中でも「天地長春」の句をよく揮毫に用いる。私共の住んでいる天地が長えに春のように、あたたく、おだやかであることを願うのは万人共通の願いである。特に新春を迎えてこの句の意味するところを思うこと切なるものがある。



道心なからん人は、
いかに道理百千万にわかつとも、
よも心え候はじ。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「風景」松濤達文画

こだまの乗客	大野 法道.....(2)
新春放談「これからの宗教の課題」.....	(4)
名士訪問 岸信宏上人.....	(8)

— . — . — . — . — . —

◆新興教団探訪◆によせて	藤井 正雄.....(10)
お茶をおいしく 正月の煎茶	三浦 純亨.....(14)
浄土宗のおしえ「三心について」	大谷 旭雄.....(16)

— . — . — . — . — . —

元和偃武	鶴田 湛泉.....(27)
ご法語をいただく	(13)
読者の声.....	(20)
高僧夜話.....	(22)
仏教の常識	(32)
連載 読話 みんなの法然さま・僧兵のいかり.....	高橋 良和.....(24)



客乗のまこ

——決定の信は生きている——

主法寺光明山大本

道浩野太

去年の十一月二十日、京都からの帰り路、駅で新幹線の、「こだま」上り100車に乗った。座席指定券は同行者とともに10号車B A Bのだったが、前部のデッキから乗って車内に入り、座席の番号を見ると、100幾つなので、自然、通路を後部の方へ歩いて行き自分等の席のところに近づいて、そちらを見ると、何事ぞ、われらの席に、三十才未満の男がポツ然と腰かけているではないか。

「変だな」

と思って、同行者に耳打ちしたが、幸い、B C席には誰もいなかったもので、取りあえず、そこへ坐ることにした。その男は別に携帯品を持っていなかったが、時々立ったり坐ったりして、同じことを繰り返しているようだった。そうするうちに大津も過ぎ、瀬田の鉄橋を渡った頃に、列車の座席券検閲の係員がやって来て、三四歩も距っている所から、例の男を目ざして、

「座席券のない方は……」

よく聞き取れなかったが、その声に彼れは席から立ち上って通路の方に寄り、係員と何か話していたが、そのまま消えるように去って行った。同行者に訊ねたら、自由席とまちがえていたらしいとの事であった。

京都駅で私達が乗る前に、彼れと係員との間に、何事かがあったか否か。あったとしても何ごとが語られたか。それらはすべて知る由もない。若干は推理できぬでもないが、おぼろげである。

しかし結果から見ても、彼は自由席の乗客で、いつかは退去させられる運命を背負いつつ、この指定席を、占領していたことは確かである。

いずれ旅行で、時間を車窓の中ですごすなら、静かで安定していた方が、旅の疲れは軽くてすむし、他人に迷惑をかけることもない、というものはなからうか。



この一文は、京都へ行っている留守中に、編集部の人が来訪して、托していった執筆依頼の置文に、「……できることなら、新年に寄せて……」

とあるのに答えたものである。新年のことを求められたのに対して、旧年をもって酬いるとは、気の利かぬも甚だしい譏りを免れないかもしれないが、浄土門にあっては、人の世の旅路に、「決定の信」という、静かなる安定を指標する。それは新年旧年は勿論のこと、時代と社会を越えた、一貫した生き方の、ゆるがぬ態度である点から、申し開きはあると思う。イヤ、新年に於いてこそ、実にこうした訓練に、一層の重要性が増すのではないであろうか。今ここに、静かなる安定を訓練するものと云ったについて、見方によっては、異議が出るかも知れない。というのは、安定とは、一定の心境に止まることであって、少しの動揺をも許さないものと見なくなるからである。果してそうであろうか。

法然上人の門弟の中にその例を見ることが出来る。乗願房は平素、上人から決定の信の肝要なことを承って、それは、大丈夫と知った心に自信を固め、安定は秘かにしまっておくべきものと心得ていたらしいが、ある時上人が、

「このたびこそは、どうあっても往生を成し遂げたいものよ」

と感慨をもらされたのを聞いて、早速、

「師の御房に、そのような不安定の動揺があったのでは、人々の決定往生はどうなりましょう」と申したところ、上人は微笑を浮かべながら、

「まさしく、成し遂げる時まででは、こうした思いはなくなるものか」

と、生きている決定の信の姿を明示されたのである。有名な「一丈の堀」の法語には、百鍊の鉄にも比せらるべき、安定の訓練が表わされている。

「一丈の堀を越えんと思わん人は、一丈五尺を越えんと励むべし。往生を期せん人は、決定の信を取りて相励むべきなり。」

《新春対談》

これからの宗教の課題

竹 中 信 常



岡 崎 澄



司会 巨大な社会のエネルギーのなかで、ややもすると、個人や、自分をみうしないがちな現代の生活です。どんどん進歩発展し、複雑化する生活のなかで、当然、将来の宗教のあり方も大きな課題とおもいます。二十一世紀の宗教について、お二人に、自由に対談いただきたい存じます。竹中先生からどうぞ、

個人宗教より社会宗教への脱皮

竹中 二十一世紀の宗教ということですが、現在の宗教界の動向は政治・教育・社会・文化との関連において考えねばなりません。かつては人間の主体性とか個人の救いとかいう、切り離された人間としての宗教の受けとり方が重要であったのです。しかし今未来の宗教のあり方を考える時はやはりこの点が重要なるところとなると思います。かつては念仏とか坐禅とかいう個々の問題を取りあげ、実践にうつしたのですが、現在からは先にあげた社会一般の動向の中に宗教を見なければならぬのです。ここに宗教者としての課題があると思います。僧侶一人々々が寺院内にこ

もるのではなく広く社会に出て、その中で宗教的な情操を取り行なわねばならないのです。そこであなたはいろいろな面で体験されたそうですが。

岡崎 私は夫が戦死したため、戦後は何か自分でしなければならぬと思い、心のささえとして、マルキシズムにはしたのです。ここでは、貧しい人々のための、いわゆるプロレタリアの開放ということを前面に出しているのです。しかし実際にはその組織の上に安住してしまい、貧しい人々には冷酷なのです。その組織内に入ることの出来ない人々に与えることのできないところに限界を感じたのです。それよりもなまな素朴な庶民性あるところが人間の生きるところと感じました。

竹中 この庶民性ということはいつの時代にも、その通りです。

岡崎 この庶民性の一番近いところが仏教の本質ではないかと感じ、その庶民が一つの組織の中ではなく、一人々々の自覚のもとに生きていくところに仏教の将来性があると感じました。

竹中 私も同感です。しかし庶民から出発す

べき僧侶自身が貴族的な生活になってしまっているところに矛盾があるのです。庶民の中にある自分ということをもつと自覚すべきだと思います。どの宗派も初期にはこの地点より出発しているのですが、時と共に忘れ去られてしまっているのです。

岡崎 社会において支配者と庶民の区別はあつてしかるべきものと思いますが、その支配の仕方の中に宗教的な人間性が加味されてもよいと思うのです。有限的物壳的なもののみでの支配ではなく、人間生活の中に無限的な宗教性という面がもっと入ってもよいと思います。

竹中 ですから二十一世紀の仏教のあり方としては唯物史観の上に乗ったというか、これらを包容した上のものを築きあげていかなければならないと思います。

岡崎 ですから、最つとさまざまな庶民性の中に生きる人間観とは何かという点に疑問を持ちました。そこでたまたま知った東京大田区の上原教会の赤岩栄師が宗教とマルキシズムは矛盾しないという点を打ち出しておりましたのでそのもとに走ったのです。

竹中 赤岩師確かにそういっておりますが、マルキシズムの限界さえはつきりしていれば矛盾するものではありません。

宗教と社会・科学の関連とありかた

司会 宗教には限界はありませんか。

竹中 限界はありません。

司会 宗教を現時点で考える場合、宗教そのものによって、政治・経済・社会等が衍生しているという、単的にいえば創価学会等ですが、全て宗教が優先するという考え方、これは明らかにその限界を越えたものと考えられますが。

岡崎 それは宗教と他の時限的生活の区別がはつきりしていないためではないでしょうか。宗教と科学をよく対決させますが、本来は時限の違うものなのですから。

司会 仏教はよく科学的だといいますが、確かに一面には科学的な面をもっていますが、仏教はあくまで宗教である訳ですから、現在仏教が科学的であるから現代的であるにとらえるのは逆の様な気がするのです。

竹中 逆のものです。宗教は超時限的なもの

ですから、政治・社会現象等と比較しにくい面があるのです。ただ単に宗教といってもその範囲は広いのです。我々僧侶の側からいう宗教と一般の人々という宗教とは違うのです。一般人のいう宗教は観音様とか阿彌陀様とかいう現象化されたものなのです。そこに摩擦する面が起るのですが、広く宗教は社会現象をも包括した上にあるものなのです。又宗教と人間生活は直接的に触れ合いのものではないといわれます。例えば政治に何らかの形で宗教が触れ合うとすれば、政治に触れ合うのではなく、政治家の心に触れ合うのです。宗教の機能は確らず一つのクッションを置かねばならないのです。

岡崎 実業家が直接仕事の中に自分の信仰する宗教を取り入れたら失敗するのと同じことですね。

司会 岡崎さんは、階級闘争に於ける人間関係に嫌気がさしたのですか。

岡崎 有形的な面のみに固執する、人間の考え方に限界を考じたのです。そこで赤岩師の思想に共鳴を覚え、親にたよった生活では、真の人生観は得られないと感じ、鳥取より上

京し、六本木の洋服店に住込み、そこで虚無的になりがちな自分の立場を考え直したのです。そこで一緒に生活する学歴もあまりない針子達の真剣に生活に打ち込む姿を見て、考えさせられました。

生活の転換―明暗について―

司会 そこから教会へかよわれた訳ですが、そこにどのような限界を感じ、仏教に入られたのですか。

岡崎 その転換は、教会では、復活のキリストにかかわりをもって生きるということが強調されていたのです。このことはキリストが死んで生きるという新しい立場なのですが、単に明るい面のみを打ち出し、暗い面をいかにするかという面が欠けていましたので、これではいけないと思ったからです。たまたま歎異抄を読む機会を得ました折、そこに暗さがあるから宗教があり、そこに西方極楽浄土を願う気持が生じるのだという様なことが書れておりました。気持の整理がつかない折でもありましたので、これに飛びつき、この書が仏教転換へのもとなったのです。

司会 その暗さということは、どういうことですか。

岡崎 普通生活の中でも楽しいことと憂うつなこととの葛藤がある訳ですが、唯円が親鸞に念仏を申しても明るい気持のみにはなれないとたずねた折、暗さがあるからこそ極楽浄土があると答えられているのですが、罪を犯したなどという心の暗さが、仏の光に照されると、一変に明るく打ち出されるという、暗さが明るさによって肯定づけられるところに変ひかれたのです。

竹中 この点ほどの宗教でもいわれる所なのですが、自分自らが暗さに気づくところに本当の宗教心が目芽えるのです。

司会 そうしますと仏教とキリスト教という暗さにある程度違いがあるのですか。

岡崎 よくは分りませんが、キリスト教ではセンチメンタルな暗さがあるように思われ、普遍的な立場での暗さに欠けていたのです。日常生活から出てくる暗さはもったときびしいものです。仏教ではそのきびしい暗さを肯定した中に極楽浄土があるのだとしているところに相違があると思います。

仏教と女性

岡崎 その後機会あることに、仏教の講話を聞き歩いたのですが、一つ気になることは仏教内での女性の地位というか、考え方に疑問があるのです。

竹中 キリスト教では女性がアウトサイダーとして活躍の場を持っているという言いえますね。仏教の女性観とはどういうことなのか。

司会 仏教の理念からいえば平等なのです。しかし戒律からいっても比丘二百五十戒、比丘尼三百四十八戒の違いがあるのです。どういう訳か女性は罪深いといわれますね。

岡崎 私はそこに問題があるし、納得がいかないのです。

司会 一面その罪深い女性から生れた男性は最つと罪深いという人もあります。

竹中 これを弁証法的にいえば、そう感じさせることが罪深いことになるのです。

司会 酒を例にとれば、酒を飲むことによって乱におちいる因縁が生じるのであって、酒そのものには罪はないのです。

同様に女性自身には何人の罪もないことなのです。女性の存在によって何かを感じさせるからこそ罪深いといわれるのではないでしようか。

岡崎 それは男性の主体性の問題だと思ふのです。

竹中 いや、主体性からの判断によって、男性に主体性があるから罪深いというのです。

これを民族学の上からいえば、男女の問題は未開人ほどないのです。それは規準が違うからです。女性の方が生活力もあり、身体構造も複雑です。生物学的には女性の方が優れているのですが、これを素直に認めたのが未開社会なのです。いわゆる母権性などがこの例です。そして文化的になるにしたがって逆になってきたのです。

岡崎 文化的になってきているということは本質的にそうなっているのでしょうか。

竹中 それは文化人類学という文化であって宗教と文化という文化ではありません。文化とはあとからできたものであり、できたからといって確らず幸福とはならないのです。

岡崎 確かに経済力の上で女性が弱くなった

ということはいえますが。

仏教のえがく女性像をもとめて

竹中 仏教本来からいえば、観音様の信仰でも分る様に女性を保護するというか、大事にしているものは外にはないのです。

岡崎 少しせいたくかも知れませんが、その大事にするという、その仕方があまいということがこまると思ふのです。ある意味で女性を人間としてあつかってほしいということです。

司会 仏教自身にしても、時代によって変わって来ています。お釈迦さまは在世時の僧迦等では平等である反面大変きびしい面をもっています。ですから時によりその規律の上で差異が生じてきたのです。

竹中 お釈迦さまが悟りを開かれた原因は継母に育てられたことがあるのです。生母に育てられたとしたら、あの悟りは得られなかったかも知れません。ここにも母性としての女性の立場があると思います。

岡崎 確かに昔はそうだったかも知れませんが、現在の仏教界の組織体の中で、例えばキ

リスト教と比べた場合大変な違いがあります。明治以後、女子教育の面等社会にてその場を明らかにしたキリスト教の女性が活躍していた間仏教徒としての女性は何もなかったのではないかと、考えるのです。しかしそのキリスト教的な仕方を真似しろというのはなく、仏教本来の立場でなされるべきで、そこに日本仏教としての一つの女性像がほしと思うのです。

司会 確かに仏教は近世では家族制度の上に乗ったものとなりましたから、それを打破した上で本来の仏教の立場を出し、その上に仏教徒としての女性を社会的にするという歩みをするということが今後の課題ですね。

竹中 今後は、そういう不満を宗教運動として出していただき解決をはかることは大変必要なことです。

岡崎 そういう欲求不満は一つの暗さですがそれを素直に解決するところにすばらしい女性像ができると思いますし、その上手な解決の仕方が仏教の中にあると思うのです。司会 どうもありがとうございます。

名士訪問

知恩院門跡

岸信宏上人



きびしい小僧生活

華頂山の奥深い洋間で、七十八才とは思えぬ上人は、にこやかに、静かに語りつづけられた。

「皆さんのお力により、余生は宗門のお役に立つことを願っているだけです」

早朝四時頃から、奥の仏間で木魚の音がする。いうまでもなく、門主上人の朝の勤行である。こうした求道生活は、已に上人十一才の頃から始まっている。

「きびしい師匠でした。しかし、余り苦しいとは思いませんでした」

上人は、紀州田辺の浄恩寺、藤田善観師を師匠として持たれた。生れが農家であったが、信仰厚い地方のならいで、次男坊である上人が、入寺することになった由。

「私には四男二女の兄弟がありますが、もう残っているのは、私の外二人だけです」上人は、後年、師匠の後をついで、浄恩寺の住職になられたのであるが、知恩院門跡として、昭和二十三年十月入山されたのも、こ

の寺からであった。

言葉が分らない

「一番困った事、何かございましたか」

「そうですね。幸い私は余りそんなこともありませんでした。しかし、何としても困った事が一つありました。故郷の愛知を離れて、田辺に入寺し、更に東京に学ぶ様になってから、殆んど故郷に帰らなかったわけです。ところが、たまたま帰る様になった所が、全然、言葉が通じなくなつて異国に來たようでした。困つたやら、悲しい思いをするやらで」

いかにも、感に堪えぬと言つた上人の様子であった。宗教大学（今の大正大学の前身）に、明治四十年に入學された上人は、以後、主として唯識という難しい學問に専心された。大鹿民議という当時の碩學について、或は安土の浄嚴院に行き、或は京都の黒谷に行かれた。

「法隆寺の勸學院で佐伯寛胤上人に師事し得た事も今となっては、有難い事でした」こうした上人の學識は、その後、仏教専門學校（今の仏教大學）假山大學などで、唯識

を講ずる事となった。

「それでもね、一時家政学園で若い頃、教師をしていた事もありますよ」

「何をお教えて」

「それがね、国文なんですよ」

そう言つて、上人は静かに笑われた。

文学青年だつた

「しかしね、私は大体、文学青年の方でしてね、あの頃、漱石のものを愛読したのです」

これは、少し、驚きであつた。今の上人から、文学青年を思いだすことは、難しい。

「宗教大学時代、杉浦一先生（英文学者）の講義など喜んで聞いたのも、文学に対する興味があつた為でしょう」

「文学雑誌なども編輯した事がありますからね」

この頃では、せいぜい新聞小説のめぼしいのを読まれる程度らしいが、それでも、そうしたものを、常に心掛けておられるとは、過去の文学青年の面影が残っているのであらう。上人の和歌については、有名であるが、やはり、文学的要素が、いつか生かされてい

るのであらう。

お名号の型

上人は、毎日のように揮毫されている。全国信者の依頼も多い。柔かいタッチは、上人の生格そのものである。

「お名号は、上人独自のものです」

「まあ私なりという事にもなりますが、実は、単法は、鵜飼徹定上人の単法を見習つております。そして、仏という字だけは、恩師の大鹿上人のものです」

こんなところにも、上人らしい心づかいがあるが、記者も始めてこの事を知つた。

今はもっぱら、勅修御伝の研究をして、法然上人の遺法を歴史的な考証の中でしたつておられる由。まだまだお元氣な上人は、今、全日仏の会長として、又御門主として、東奔西走である。浄土門は、この上人を中心として、今年も大いに、発展することであらう。

ちなみに、上人は、大蓮社量誓慈阿遊玄と法名を持たれている。遊玄とは、明治四十二年布薩戒を受けられた時の号です。上人の号に「苔」というのがあゝるなどは、余り知られていません。（安居香山）

しんぼうが大事

ある海岸町に気が短く、あわただ者で、その上気一本の若者があつた。長い間海に入つて沈香を採集しようやくにして一車ばかり集めこれを市場に売り出してみたが、どうしたものか売れない、客がつかない。

その隣りの炭屋は毎日客が来、面白いように売れた。若者はそれを見ていふと腹が立ち、炭屋の子供までが憎らしくなつた。いっそ骨折つてとつた沈香を炭にして売つてみたらとそう思いついた彼は皆焼いて炭にしてしまった。それを売出してみると今度はまたたく間に売れてしまった。

しかしその値は一片の沈香にも及ばなかつた。すると丁度隣の国の金持から、全部買ひとらうという注文があつた。がすでに後の祭りであつた。

若者はいまして自分の愚を知つたといふ。



『新興教団探訪』によせて

藤井正雄

老舗と行商

備えあれば憂いなし。よく経験することであるが、昼の間は少々身体の不調に気づいていても、そのままにしていって、夜中にお腹が痛んだり、熱がでたりして困ることがある。医者に診てもらったら痛い目にあわなくてもすんだものと思うのは結果論であって、こんなときには前もってなかなか医者には行けぬものである。この際に今でもみかける富山のくすり売りの袋があると、なかなか重宝なものである。古くさい袋の中には、即座に間に合ういろいろな薬が詰められている。しかも、きわめて経済的なのである。半年ないし一年後、使っただけの薬料を支払えば、また補充してくれるからである。くすりにかぎらず、行商人の運んでくる野菜、魚な

うに思える。

既成教団と新興教団の相違を、それぞれ「老舗」と「行商」になぞらえて説明する人もある。既成教団を老舗にたとえるのは大いなる皮肉である。寺院のなかに葬式や法事の依頼がないがざりたてこもっているのは、老舗の番頭のようなのである。番頭は帳場に坐って客を待っている。そして客があれば、客の注文に応じていろいろと銘柄をとりだして客の予算と趣味にあったものを選びださせる。お坊さんとは葬式、法事を依頼されると、随喜の僧を何人にするか、三仏とか五仏とかとりきめて出掛ける。戒名も極楽も地獄の沙汰も金次第ということになる。しかも「老舗」は一般より値段が少々高い。その間に、「行商」（新興教団）は、その手輕

どの食料品や化粧品なども、一家の主婦にとっては買物にいく手間がはけぶて結構べんりなものであるようだ。このような行商で一財産をつくった人もあるし、またいまもって利用されているのも、その手輕さ、便利さがものをいっているのであり、こんなところに大衆性かくとくの秘密の鍵があるよ

さ、身近さがものをいって、せっせとお客（信者）を獲得していったことになる。明治維新の排仏毀釈の際、一部神葬化したのも、その経済性が要因の一つに数えられるのも、その間の事情をよく伝えている。

このような「老舗」と「行商」のたとえは、檀家制度に支えられた経済的基盤に安緒し、ややもすれば布教、教化力を失ってしまった観のある現代仏教界に対する痛烈な批判でもある。新興教団側に、既成仏教は未来にのみたずさわって現実の生活苦を救う力をもたない、いわばぬけがらであり、信仰は新宗教が受けもつのだといわせてしまっている。「葬式仏教」というのも、「葬式」そのものを責めているのではなくて、その批判はそれのみにたずさわった教化を忘れていることに對する叱責なのである。

われわれは謙虚に反省しなければならぬであろう。しかし、それにしてもわれわれは、あまりにも新宗教の実態を知らないことも事実として認めなければならないであろう。さきに述べた「たとえ」のように、新興教団が行商のままであった問題はないのである。しかし、行商はいつの間にか客を固定客・顧客としてしまったことであり、行商を怪物のように太らせてしまった現実を目を向けたのである。

既成化への途

戦後、宗教統制が解除されて「七日に一つの割りで新興教団が生まれる」といわれたほどの「神々のラッシュアワー」がおとずれ、新興教団は統制と産ぶ声をあげた。戦後二十年たった今、われわれはまるで泡沫のように消え去っていったおおくの新興教団のことを知っている。しかし、このことはいまは触れまい。ただ、淫祠邪教の烙印をおそれて世上の矚目をかいたがらも、雑草のごとき根強く生き抜いてきた教団はいまや大教団と成長している現実を直視したいだけである。

たとえば、霊友会は昭和二十四年の脱税容疑、二十八年の女中に加えた会長のリンチ事件、それにひきつづく赤い羽根共同募金横領事件などにもかかわらず敗退することを知らなかった。霊友会から分派した立正佼成会も、昭和三十一年、土地問題からんで読売新聞によってかつてみられぬほどの執拗な攻撃にさらされたにもかかわらず、現在、信徒二五〇万を擁し、全国に十九教区一七四支部、沖縄ハワイ、ロスアンゼルス、海外三支部を有する大教団と成長している。最近完成をみた「大聖堂」は総工費三十五億円、八年の歳月を費しての八階建ての円形ビルで、一月の電気代でも二五〇万円という、近代設備を誇りにしている。佼成出版社、学校法人「佼成学園」、佼成図書館、佼成病院、育児院、佼成霊園……

とその多角経営には、後継者の育成が行なわれており、現世利益の主張は方便門として後退しつつあり、教義の合理化が進められている。また、暴力宗教といわれた創価学会も、日蓮正宗の大客殿にひきつづく正本堂の建築には三五五億円もの浄財を集めるまでの経済力を有し、次の衆院選挙には代議士二十名の当選を目指し、政治的発言力は増大の一途を辿っている。創価大学の設置も着々と進み、次第にマンモス化するとともに既成化への途を着実に歩んでいるのである。

宗教協力

世論のきびしい批判にさらされて、自衛手段で新興二十四教団が集まって「新日本宗教団体連合会」（略称「新宗連」）を結成したのは昭和二十六年の秋であった。神社本庁、教派神道連合会、全日本仏教会、日本基督教連合会などで構成されている日本宗教連盟には翌二十一年に正式に加盟を認められている。世論・ジャーナリズムの批難のなかに、新宗教は着々と教祖の教義体系づけを行ない、教線拡張の基盤が組織化されていたのであり、現在、新宗教加盟のものだけでも八十数団七百万人に及んでいるといわれる。

新宗連結成十五年の祝典は名古屋、大阪、東京、金沢と本部、総支部で盛大に挙行されたが、十五年の歩みは、世相の落着きとともにいわゆる紳士化して宗教協力の実をあげてき

たといってよい。折しも折り、昭和四十一年十一月六日から一週間にわたって、タイの仏都チェンマイ市で開催された第八回世界仏教徒会議には、曹洞宗と真如苑とが新旧あいたずさえて全日仏を代表して列席している。すでに大本教によるエスペラントを通しての国際親善など、また仏教系新宗教による国際会議出席などの貢献は否定することはできないにしても、既成仏教々々の連合体としての全仏代表として新旧仏徒が連帯したのははじめての出来事である。真如苑は、戦後真言宗醍醐派から別派独自して新宗連に加盟した教団で、戦後突如として生まれた他の新宗教とは趣を異にしているかも知れない。しかし、今や大教団となった立正佼成会、妙智会などのおおくの新宗教が全仏教の宗教協力を提唱しているという事実をわれわれはどのように受けとっていったらよいのであろうか。われわれはあまりにも新宗教を知らなすぎる。現在はどうももっと知るべきことが要請されている時はないのである。

紙面も尽きてしまったので、次回からは新宗教々々を順次、訪問して、具体的にわれわれが今後考えていくべき問題点などを浮彫りしながら、考察していくことにしたい。今回は真如苑教団を訪問する予定である。

ご法語をいただく

道心なからん人は、いかに道理百千万にわかつとも、よも心え候はじ。

（津戸三郎へつかわす御返事）

道心というのは、普通には仏道を求める心をいいます。つまり上は仏さまの智慧を求め下は大衆を救わんとする心であります。俗に今道心とか青道心というのは、中年になってから剃髪して間のない者をいいます。しかしこのご法語の道心というのは、往生を求める鶴のことを意味しています。そこで道心者というのは、仏法を修行する者、僧侶のことをいいますが、法然上人は仏法の修行者は必ずしも念仏行者でないといわれています。即ち勅修御伝第四十五に

「道心者、智者などの念仏こそ往生はし給らめ、あぐれ罪をのみつくり、一文字をだにもしらざらんものは、念仏申とても、往生不定なりと疑ものは、本願には善惡の機をかねて、おこし給へりといふ事をしらぬ人なり」と申されています。つまり道心者は經典の

上での理解を求め、学問をするところから、とかく阿弥陀さまの本願の有難さを見のがしてしまおうのであります。従つてもっと簡単に

「道心ある人も申てむまれ、道心なき人も申てむまれ」

と申されています。道心があるとかないとかは問題でなく、ただお念仏を申すことによつて往生できるのであるといわれています。ここでの道心は仏道修行にはげむ心ということとであります。

意味は同じですが、もっと明瞭に教えられたご法語があります。法然上人は常にこう仰せられていました。即ち

「二には道心のおこる時乗ぜず。その故は、おなじく念仏申すとも、かくのごとく道心ありて申さんずる念仏にてこそ往生はせんすれ、無道心にては念仏すともかなふべからずと、道心をさきとして、本願をつぎにおもふ時乗ぜざるなり」

ここに乘ずるとあるのは、阿弥陀さまの本願、即ち他力本願に乗ずるということです。なまじ修行にはげむ心があつて、いかに本願

といえども怠け者のお念仏では駄目であると考えられるように、そう考える人自身が阿弥陀さまの光明に浴することができないのであるといふのであります。

さて、このご法語の道心は、少し意味が違つて、人生観なり宗教観なりによつて、自分とは阿弥陀さまの無量の寿命、無量の光明に帰依して、それと一体となるためにお念仏を称える心、つまり往生を願う心のこととあります。しかしもっと一般的に信仰心といつてもよく、信仰のないものに、いかに理論を整然と数多く説いたにしても、その真意をさることができないというように解してもよいと思います。

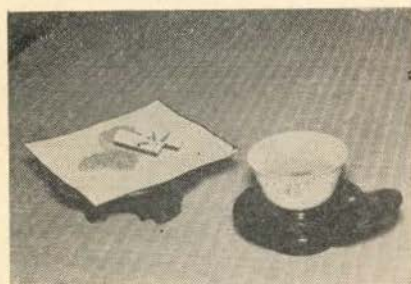
「念仏申すべからずとおほせられ候とも、往生に心ざしあらん人は、それにはより候まじ。念仏よく／＼申せとおほせられ候とも道心なからん者は、それにはより候まじ」

根本的な問題は、その人に往生を願う信仰心があるかないかです。決して理論ではありません。阿弥陀さまに帰依しない人はいか程説き明そうとしても無駄であります。

（村瀬秀雄）

お茶をおいしく その1

正月の煎茶



黄檗幽茗流家元

三浦純亭

「人まことに一日も茶なかるべからず」(蘇東坡)と申しますように、うれしいにつけ、悲しいにつけ、先ずお茶が出ます。

煎茶は、昔からあまりに私共の身近にありますまいか、心して見る人は少くなく、又、お茶の入る方にしても、案外無造作に入れられておりますが、一寸した心遣いで美味しく味わうことも、饗応することも、より生活を豊かにする事をも出来ます。

薬用であり飲料としての煎茶
趣味としての煎茶

道としての煎茶

と、いくつかに区別致しますが、まず飲料としての煎茶から、向う一か年間稿を進めたいと存じます。

それでは新年にちなみ「お福茶」からはじめさせていただきますしう。

茶には芳香油がありますので、特に悪臭を消す作用を持っています。これは宗教的にとりましても、極めて大切な意義があります。

宗教では非常に清潔を重んずる故、神仏に使える際には、必ず身体を清めますので、口中が臭うとか、身体中の有機物が幾分腐敗しかけた際などに、茶を用いると、その腐敗は立所にやみ、悪臭もただちにとれて正常になり、神前又は貴人の前に、或いは神聖なる場所にまかり出る際、最も理想的な潔斎法として行なわれて来たものであります。茶は仏教と一緒に僧侶により、日本に伝えられ、修業中の睡魔除(茶の精分の一分のカフェインの作用により)、又は殺菌剤、又は解毒剤として清められる意味からも、清浄なもの、より清らかなものとして、仏前に供せられ、供養につかわれているところから、これを不吉なものとし、又は「すべてをお茶にする」と云う忌み言葉から、婚礼の席などに用いることをきらう風習が各地にあります。これは迷信論者の言葉であり、九州地方ではよくこんで、特に婚礼に用いております。何故と申しますと、茶の樹は種を播いてから一度だけ移

植され、兼び植え換えても育たぬ性質を持つておりますゆえ、「一度嫁して貞女二夫にまみえず」との同じ意味にとり、茶樹は小さな樹であります、大樹の陰・叢地にも良く成長し、百年の樹齡を保ち（嫁して忍従刻苦に屈せずして長寿を示し）、又常に緑で根深く、寒風霜雪にめげず、凜然としていて（人生の憂き世にもめげず）、花のない期節に花葉に芳香馥郁として（一家の榮を示し）、又、飲料として仙菓としても人類に貢献するところ多く、全く茶の木は聖樹であり、聖なる飲料であればこそ、御目出度き人生の門出にふさわしい飲み物と云えましょう。

しかし、永く伝わる迷信は一朝一夕でなかなか覆えすことが出来ません。どうしても目出度い席には用いたくなくば、「お福茶」として入れ、饗しては如何でしょうか。福茶は、むかしから年越・正月節分に入れるお茶としてよろこばれております。

入れ方は、結び昆布と青梅に煎茶をそいだもので、昆布は沃度を含み、梅も保健上よろしく、茶はビタミンCが多量含むことによつて、医学的見地からもすばらしい飲料であ

り、又「昆布はよろこぶ、梅は齡重ねるまで」と申して、言葉の上から大変縁起の良いものです。皆さまもお正月に早速お試めし下さいませ。又、婚礼の席でも棲湯ばかりでなしに、このお福茶を用いては如何でしょうか。

お菓子は、勅題にちなんだ物、又は松竹梅、鶴亀、白梅紅梅、松葉などのお目出度い形の半生菓子か、干菓子などを選び、銘菓菓子器に紅縁取り（四方紅）の敷紙にお菓をのせ、客にすすめます。

出し方は、客前にお菓子が先き、お福茶があとになります。

頂き方は、客は一礼して、お福茶を一口頂いて口をぬらしてより、お菓子を頂き、そしてお茶を飲み干します。昆布・梅は頂いて、種は懷紙に包んで持ち帰っても、液だけすり磁碗の中に入れ、残してもよろしく、又、お福茶だけ頂いて、お菓子は「御目出度いから」とか、「美しいから頂いて帰ります。」と、こゝろわって持ち帰ってもよく、又、主人側も気をきかせてお持たせ致しましょう。

このよか大福茶と申し、湯沸かしの中に大豆を入れ、「齡重ねるまでまめまめしくと申

し、其の湯でお福茶を入れます。大豆の中にも保健上必要な成分を有し、まことに健康的な目出度い飲み物と云えましょう。

(イ) 上手な入れ方

茶の入れ方は、一合の熱湯の急須に約茶さじ一ぱい強入れて、一分間おいたものをつぎわけ。

(ロ) 家庭の煎茶茶碗で結び昆布三つ、梅二つ、七合目茶をつぐ。

(ハ) 趣味としての、小ぶりの煎茶器でしたらば、昆布二つ、梅一つ

(ニ) 梅は充分酔につけてあるもの（かきかさしたものはすい味が少ない）二つ

昆布は上等の出し昆布丈五センチ、幅五ミリ

水にしめしたふきんで軽く押えれば結びよい。

お茶は仏教とは因縁浅からぬ飲み物です。表題の通り「お茶をおいしく」いただく、コッスを、四季に渡って掲載いたします。ご好読下さい。

浄土宗のおしえ <1>

三心ついて

大谷 旭雄

浄土宗の修道の内容は、安心(三心)起行。

作業をもって組織されていますが、このうち特に根本主体をなすものは安心と起行とであります。しかし単にこれらが別々にあるのではなく、その関係は鳥の両翼や車の両輪などにたとえられるところであります。従って宗祖(法然上人)は『御消息』に「浄土に往生せんと思わん人は安心起行と申して心と行と相応すべき也」

といわれ、安心起行をもってその実践行とされ、しかもそこに心と行と相応すべき也といわれております様に、心(安心)と行(起行)とはたとえばダイヤモンドとその光の関係が、ダイヤ(心)を離れてその光(行)はなく、また光(行)をはなれてダイヤ(心)がないように、しかも、又これらが一つのものでもなく、異なるものでもないような関係にあつて、互に相応しあうべきものと申され、つまり、起行とは念仏でありますから、そうした関係から云えば安心によつて念仏がはげまされ、また念仏によつて益々信が深められて行くものでなくてはなりません。

ともあれ、いま安心起行といわれるその安心とは、宗義の上では種々と複雑な区別もありますが、いま一応これからお話し申し上げる至誠心・深心・回向発願心の三心をひつくるめて安心というものと理解しておきたいと思ひます。そしてその意味は宗祖が「心づかいの有様往生する心の有様」「往生すべき心はえの沙汰」等といわれます様に、必ず往生するぞという心の有様であり、つまり、浄土教的な信念が安心であります。ところでこの

三心はもと『観無量寿経』に

「もし衆生あつて彼の国に生ぜんと願ひ三種の心を発せば即便ち往生す何等かを三とする 一には至誠心 二には深心 三には回向発願心なり 三心を具足するものは必ず彼国に生ず」

と説かれるのに基づいてありますが、この『観経』の説示に深く注目され、浄土教の安心内容として、唐の善導大師はその著『観経疏散善義』の中で、この三心について一々詳細に解説を加えられ、これを『無量寿経』の第十八願に示される至心・信楽・欲生我国という本願の三心に配して、これによつて浄土教的信心を明かにされたのであります。そして「この三心を具すれば往生間違ひなし」とし、更に『往生礼讃』には、このうち一心でも欠けたならば往生は不可能であると力説され、往生浄土の正因として、これを重視したのであります。

宗祖も偏にこうした善導大師の意をうけついで、その著『選択集』では特に「念仏行者必ず三心を具足すべき文」という一章を設け、極楽に生れようと願う人にとってこれら

三心は、もれなく具足すべきものであるとい

われ、念仏行者にとってこの三心が「至要の心構え」△選択集Ⅴであるといわれ、また『七ヶ条起請文』には

「往生浄土の人の要法は多しといえども浄土

宗の大事は三心の法門にあるなり」とすら云われているのであります。

以下、略々三心の一々について要点を記していききたいと思います。

○ いま、至誠心の説明をする前に、どこに話のネタがあるかも知らないのですが、子供の頃、もうおぼろげになりましたが、父親から聞いた「エンマ様と念仏ばあさん」の話を記そう。ここに出てくるエンマ様は衆生の罪を監視し、死者は必ずこのエンマ様の前でその審判をうけ、これによって極楽行か地獄行かを決する存在として扱われています。昔、一人暮しの老婆があつて善知識のすすめによつて念仏の教えを聞いて以来、隣り近所の人々から「念仏ばあさん」と異名をとる程、念仏に精進していた。やがて天寿をまっとうして他界したばあさんは、早速、エンマ様の前に

ぬかずき、その判決をまつた。

エンマ王「残念ながら極楽行の名簿にはお

前の名前は記されておらんぞ」

おばあさんは一瞬がくんなだれた

老婆「あのう……実は生前私は念仏ばあさ

んといわれる程念仏を……」

大王はこのばあさんのうったえの熱意に動か

されて、再度さきの名簿をめくり始めた。

まもなく

大王「あつた〜。——だがこんなに小さ

くだ」

ばあさんの目に喜びの涙があふれた。どんな

に小さな文字で名前が記されているようと、

これでどうやら極楽行が決したのである。そ

こではあさんの生前の回想がはじまった。

「思えばある夏の夕暮のことである。一人暮

しの私は激しい雷鳴に身もふるわせておびえ

ていた。その時ビカッ、ドカンと私の身邊に

大音をとどろかせて落雷した。その時

おたすけ下さい、南無阿弥陀仏、

そうだ、この時の念仏こそわたしの真実の念

仏だったのだ。なる程生涯たくさんの念仏を

修したけれども、多くは見せかけの念仏だっ

たのだと。

この話の真疑はともかくとして、いかに真

実が得がたいものかを教えられるのでありま

す。ところで、至誠心について宗祖は善導大

師の言葉を引いて

「至というは真也。誠というは実也、一切

の衆生の身口意業に修せんところの解行、必

ず真実心中にあらわさんことを思う。外には

賢善精進の相を現じて、内には虚偽（いつわ

り）をなす事なかれ、内外明闇をえらばず、

必ず真実を用いよ、かるが故に至誠心と名づ

くといへり」△御消息Ⅴ

と申されております。つまり、至誠心とは真

実心であり、うらおもてのない心であり、ひ

らたくいえばまごころであるということが出

来ます。また逆に宗祖は、不真実なる心につ

いて

「内はおろかにして、外にはかしこき人と

おもわれんとふるまい、内には悪をつくり、

外は善人の様子をしめし、内には懈怠（けだ

い）なまける」の心を懷きて、外には精進の

相を現するを真実ならぬ心とは申也」△御消

息Ⅴ

と申されておりますようにこれによって、内外相応をもつて真実の基調とされていることが知られますか、従つて宗祖はこれについて四句の不同、つまり

- ① 外相は貴げにて、内心貴からぬ人
- ② 外相も内心もともに貴からぬ人
- ③ 外相は貴げもなく内心貴き人
- ④ 外相も内心もともに貴き人あり

等をあげて分別され、この中、先の二人について、今きらうところの至誠心がかけた虚仮（いつわり）の人であるといわれ、後の二人は至誠心を具した真実の行者であると指示されているのであります。従つて、こうした中に先の念仏はあさんの念仏を見ると、多くは第一に当り、落雷の際称えたたった一度の念仏こそ第四に当り、真実の念仏であつたのだということが出来ます。

○

次に、深心というのは、善導大師はまずこれを「深く信する心」と釈されました。また宗祖は、これについて「我が身のわろきにつきても深く本願を信じて疑はざらん心」と述べられております。

そこで何を深く信するかについて二種があつて、古来、二種深心といつております。

その第一は信機といい、自分の人間としてのありのままのすがたを如実に見きわめ、帰するところこのままでは三界の苦しみから抜け出すことの出来ない罪深いものであると自覚し、信するのであります。云うまでもなく、世間の法律や倫理の標準からは特にこのような罪深いという深刻な自覚は出ないであります。か様に罪深いものと自覚せしめるのは、そうした罪深いものを救わんとする仏の救済力が大きな力となるのであります。うし、更には絶対善なる仏陀を明鏡としてこそ、はじめて自覚できるものであります。

智慧第一といわれた宗祖ですら、十悪五逆と自覚されているもの、そうしたところからの真の自覚であつたと思われまふ。

その第二は信法であります。つまり、阿弥陀仏は、この罪深く苦しみより抜け出すことのできないものの為に、その名号を称えしめ、これによって救済を全うしようと誓われた、その仏の本願力を深く信するのであります。この信機信法二種の深心の関係について、宗祖は

「はじめに我が身の程を信じ、のちには仏の願を信する也。ただし後の信を決定せん為にはじめの信心をあぐる也」と申されておりますから、二種の深心が示されたといつても、要するにそれは弥陀の本願力を信せしめる信法が主目的であることが知られます。もし、信機という人間本来の機根の内省をはぶいて、ただちに仏の本願力を信せしめようとするならば、或は往生を疑うことにもなり、また我が身の程を知らず、自ら高ぶつて他を見おろす傲慢の人は、しいては仏の誓願までも見下し、疑いかねないからであります。

とはいふものの、この信機と信法とは互にはたらきあつて次第に信心が確立されて行くのであります。また、宗祖は深心という浄土の信念を確立していく方法として、善導大師の方をひいて二つの方法が示されております。つまり、その第一は就人立信といひ、他の人格について自己の浄土信念を確立していく道と、第二は就行立信といつて浄土の実践行こそ、真に仏によって恵まれた最後の道で

ある。見きわめることによって信念を確立していくことをいうのであります。

いま、この深心を宗祖は

「三心はまち／＼にわかれたりといえども要をとり詮をえらんでこれをいえば深心におさめたり」八三部経釈V

といつて、三心中で最も重要な心であるといわれてゐるのであります。

○

第三に回向發願心でありますが、これについて宗祖は

「わが所修の行業を一向に極楽にふりむけて往生を願う心」

と記されております。

この回向發願心にまた二つあって、その第一は、往相回向（自利回向）といいますが、つまり、過去より今日までに修した、あらゆる善行を悉く浄土へふりむけ、そこへすべてを統一して浄土に往生したいと願う心を用ひてあります。このことを宗祖は、「御消息」により具体的に示されて

「すべてわが身の事にも、人のことにてもこの並の果報を祈り、同じくのちの世のこ

となれども極楽ならぬ余の浄土に生れんとも、もしは都卒に生れんとも、若しは人中天上に生れんとも、たとえかくの如く彼れにて此れにても、こと事に廻向する事なくして一向に極楽に往生せんと回向すべきなり」といっております。

つまり、浄土行者のあらゆる生活が浄土にどうしても往生したいという目的に統一してゆくことに外なりません。

その第二をまた還相回向（利他回向）といつて、宗祖はこれを「往生して衆生を利益せんとする心」といわれておりますように、先ず浄土に往生してから還つて大悲を起し、教化利益しようとすることを云うのであります。然し、さし当って自分が如来に救われるについては、先の往相だけでもこと足るのであり、それはもしそれらが完遂されれば、浄土の菩薩行として自然に還相回向に進まざるをえなくなるからであります。

以上、略々三心の一々について考えてみますと、あたかも三心が別々の心で事々しく思われ勝ちであります。宗祖は逆に具し易き心であるといわれて後

「詮じてはただま事の心ありて、ふかく仏の誓をたのみて往生を願わんとするにて候ぞかし」と申されてゐるのであります。しかし先述しましたように、一心をもかかさず三心を具足してこそ往生が可能であるといつてありますから、念仏している現在の自分にとつて、自分の信仰が確立したかどうか、つまり三心を具足したか否かは少なからず関心事であると思ひますので最後に宗祖の法語を引いておきたいと思ひます。その一例に

「三心を具することは別の様なし、阿彌陀ほとけの本明にわが名を称念せばかならず来迎せんとおほせられたれば引接せられまいらせんとするそとふかく信じて心に念じ口に称するにもうからずすでに往生したる心地して最後の念にいたるまでたゆまざるものは自然に三心は具足する也」と。

要するに「一枚起請文」に「ただし三心四修と用すことの候はみな決定して南無阿彌陀仏と申して疑いなく往生するぞと思ふうちに」こそ三心も四修も自然に具足されているといふべきであります。

お念仏と泥棒のこころ

天野四郎という盗人があった。晩年、法然上人に導かれて出家し、教阿と号し、ふたごろのない念仏者となった。

あるとき、教阿は、上人の草庵に一夜の夢を結んだ。だいたい夜ふけたころ、隣室の物音にめをさまされ、ゾット様子うかがっていると、かすかに念仏の声がきこえてくる。かれは不思議におもひ、せきばらいをすると、その念仏の声はやんだ。妙なことをするものとおもひ、夜があけてから尋ねようと思ったが、そのままになってしまった。

それから、しばらくたったある日のこと、教阿は上人におしえをうかがうのであった。

「もとより無学文盲のわたくし、甚深の法門をうけたまわりましても分かるはずがありませんが、ただ、決定往生するかんじん要の一言を承り、それを生涯のかたみとしたい

と存じますが……」

法然上人は、ゾット聞きいっておられたが、しずかにこたえられた。

「教阿、念仏には別に甚深の義というものはない。念仏申すものは、かならず往生することを知ることである。念仏は修しやすい行だからといって、申す人は沢山あるが、往生するものの少いのは、全く決定往生の真義を知らないからだ。

さきごろいつだったか、御房と源空とただ二人寝たことがあったが、あの晩ふけて、コソソリと念仏したのを、御房は聞かれたか」

「はい、夢うつつのなかにお聞き申し上げりました。」

「ほう、聞かれたか、あれが、とりもおさず、決定往生の念仏よ、かざる心にて申す念仏は往生しないのだ。決定往生しようと思うならば、かざる心なくまことの心で申すことだ。人というものは東西をわきまえない子供や、畜生のまえではかざる心もでないが、同行のまえではすぐにかざる心がおこる。

どうしたら人目をかざる心なくまことの心で念仏申すかという、常に人にまじわって心静まらないかざる心ので

るものは、夜ふけてみる人もなく、聞く人もないとき、ソットおきて百遍でも千遍でも心にまかせて念仏するのがよい。そのときの念仏には、かざる心というものがなく、かならず仏の御意に相応して決定往生ができるのだ。

この心さえのみこめば、朝でも昼でも、いつでも人に聞かれる心配のないところで申すがい、所詮決定往生をねがう真の念仏を申そうという意地は、たとえていえば泥棒のころろだ。」

泥棒と聞いて、教阿はビククリしたが、上人はいたって平気で言葉をつづけた。

「他人の財におもいをかけて盗まんとおもう心は、底はふかいけれど、表面はさりげないように振舞って、少しもあやしげな様子を見せまいと思うのと同じことだ。その盗み心は他人には全く知れないので、少しもかざらない心といっぴい。

決定往生をねがう心もやはりこれだ。人前では念仏を申す気などみせないで、心にはたえず忘れないことだ。このときの念仏は、仏さまのほかに誰も知るはずがない。仏さまさえご承知なら往生さらに疑いはないだろう。」

上人の言葉に、教阿ははれはれしい顔をあげて上人をみ

た。かれのうたがいは一時にはれてよろこびの心とかわった。

その後、弟子の法蓮房が上人に、教阿のことをふれて、「泥棒のヒユをお話あそばされたそうで……」といった。

「そうよ、以前は盗人だったと聞いていたので、ちょっと対機説法してみたのだ。どうやら納得したらしいから決定して往生するだろう。」

と、上人は念心の微笑をもらわれた。

「お師匠さまも存外おひとのわるいこと……」と、法蓮もおぼえず微笑をもらした。

<新刊>

真野正順 著

B 六判 三五六頁
価七〇〇円（七〇円）

「日本人の信仰と生活」

△内 容▽

香を焚く・生活を強く美しく

先聖行ける道・真野正順氏を偲びて

お申込みは本会へ

勝れた浄土教を再確認のため

知っておきたい邪宗のカラクリ

註 文中の引用文は創価学会第二代会長戸田

城聖著 日蓮正宗方便品寿量品講義（和光社発行）より引用したものであり、文中講義書とはこの本のことである。尚戸田は序文の中に『余は会長就任以来七年余にわたり一級講義として両品（方便品と寿量品）の真実の意義をくりかえし講述してきた、と述べている。この講義が創価学会の全智能を綜合した一級講義であることを特に御記憶願いたい。

一、戸田の思想は始めからおかしい

講義書の序二頁に『われらの信心し奉るは全くこの御本尊にあり、決して法華経や方便品や寿量品を信心しているのではない。』と宣言しているが、創価学会が御本尊としているものは、大石寺にある大きな板まんだらである。

る。これには日蓮上人の教えの総てが書いてある。この板のまん中に南無妙法蓮華経（釈尊の教えである妙法蓮華経に帰依する）と書いてある。この中から戸田が言明したように信心していないという法華経を抜き取った、残るものは何であるか、只板だけである。インチキ宗教は何の意味もないこの板を拝ませる所から始まるのである。

二、創価学会は他宗と議論しても絶対に負けない

今迄に創価学会が他宗と議論して負けたと聞いたことがない。学会のやっていることを見ると、実にくだらないでためて宗教に縁のない事を真実らしくさせていながら、浄土宗と議論するといつも平衡線を迫って結論が出ていない。これは不思議なことである。然

しこの講義書を見ると、その真相がよく判り、実に邪宗、インチキ宗教とはこんなものであるかということがよく判る。

講義書には方便品、寿量品の読み方（意味のとり方）として文上、文底の二種類ある。

文上の読み方は天台大師の解釈により何処にでも認められる最も勝れたものとされているが、文底の読み方は創価学会独自のものである。これが邪宗教の根原をなしているのである。即ち牧口と戸田が最低の智能でデッチ上げたものであり、その説明を求められるとすぐにボロが出る為『疑ってはいけない、疑うと罰が当る』といった質問を禁じているのである。

それで常に学会員を文底思想で教育し、万一他宗から攻撃された時には文上の解釈で受け止めているから、いくら浄土宗で正しい教義で攻撃しても結論が出ないのである。天台の正しい解釈を相手にして勝敗がきまれば反っておかしな事ができてしまうのである。ここに創価学会が外部からの攻撃に絶対に負けない理由があるのである。そして議論が結論が出ない時は学会員に向っては勝ったと宣伝

しているのである。又学会員もそれをそのまま信ずるようによく訓練されているのである。

三、仏を自覚しない日蓮がこうして仏の座に着いた

方便品の十如是のすぐ前に『唯仏与仏乃能究尽諸法実相』訓読は『唯仏と仏と乃し能く諸法の実相を究尽したまえり』で、この中にある仏与仏は、釈尊が『仏というものは』又は『仏同志は』と一般の仏を指して説明したものであるのに対して講義書六一頁下段に『また仏と仏とのみ知っておられるとは、日蓮大聖人と第二祖日興上人のみが、よくお知りになっておられるのであります』と説明しており、ここで仏でない日蓮が仏の座に着いたのである。これが無根のデッチ上げと云うものである。

ここで考えられることは、日蓮が生れる千年以上前に既にあったこの方便品の『仏与仏』の一字が日蓮であるというこのデッチ上げを真実として教えるものと、その通りでございましてそれを信ずるもの、現在何百万の人が

それを信じて目かくしされてその指導されるままに動かされているその姿を見ると、誠に背すじがぞつとするものがある。創価学会に於ける日蓮仏とはこんな根拠のないデッチ上げの存在なのである。だから又興味本位のベストセラーの本を読むよりこの講義書の『文底の読み方』を読む方が余程面白い。

尚ここで最も重要なことは講義書一七九頁上段に『御書のどこを拝読いたしまして、われ仏になって靈山でお前らを救ってやるのか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になるだろうと書いてはないのであります』と、戸田は日蓮を仏にして見たが、さすがに御書を替えるのには氣後れがしたのか、実際には仏ではないのだということをしてこで自白しているのである。

四、方便としての罰と利益

方便とは手段であり方法である。釈尊は修行時代から成道まで順を追って説き、無智な衆生が釈尊の最高の教えが理解できるまで導き引き上げて最後に十如是を説かれた為、この教えに方便品の名が付けられたのであつて

手段として種々の言葉や譬えが用いられたことがよく判る。だから何かを方便として用いた場合には必ずその先に目的があるものである。

講義書三四頁上段から下段にかけて『当日蓮正宗には方便が二つあります。それは罰と利益です』とある。創価学会の場合、方便のその先の目的は何であるか。信者の幸福でも何でも無い。創価学会をバックにした公明党の政權獲得である。この目的達成の為に強力な党の後援者が必要である。その為に折伏を命じ、何も知らない多くの人々を集めているのである。だから講義書には信心することは折伏することであると、そのみ強調し、折伏の何たるかを講義書全頁通じてどこにも説明していない。創価学会としてみると方便としての折伏だから人が集まればよいのであつて、折伏とは何であるかそんなことはどうでもよいのである。だから折伏に来た人に折伏の真の意義を聞いても何も知らない。要するに創価学会の罰と利益はの『分け前』をやるから仲間に入れ、若し勝手なまねをするとは命はないぞ』とすこむのを同じである。

繪	連
話	続

みんなの法然さま

—僧兵のいかり—

高橋良和

さしえ 小林健造



小さな石を水面に投げてみると、波紋が水の上にただようのである。小さな波がだんだん大きくなって、やがて水面一ぱいに波紋がひろがってゆくのがわかる。

それと同じように法然上人のおしえは、京都の吉水の庵室から日本全国にひろがっていったのである。

これまでの仏教に天台、真言のような、いわゆる皇族や、貴族の信者が多かったので、上御一人が法を聞くために高僧、名僧を宮中に招いて祈禱や祈願を行なうだけでこと足りたのであるが、法然上人のおしえはあらゆる人々が救われるという、救い残こしのないという万人対象のおしえであったことからして、その法はいよいよ全国に深く浸透していったのは当然である。

発展するということはよいことであるが一面、逆な結果を

もたらすこともあり得ることがある。

というのは、この上人のおしえを信じたり、行ったりする人が多くなってきたことは非常によろこばしいことであるが、その信徒や、道を説く弟子の、なかに、真にそのみのりを理解しないで、やや無軌道な行動に走ったり、上人のおしえと異なったことを説くともがらが出てきたのである。

これは昔も今も同じことで、なにも法然上人の時代までさかのぼらなくとも、今、わたくしたちの眼の前にもこのような人たちはいるのである。

もちろん法然上人の当時にもこのような人が何人かはいたらしく、上人も、

念仏をすすめることはよいが、それを利用して生活を乱だしている人もあるようにきくが心配なことである。



と、心にかけていたのである。こうした弟子たちの行動は、またそれをうまく利用する人たちににとっては念仏という、新しいおしえに対する反発をするよい場合であつたらしく比叡山三

千坊の僧侶たちは、

よーし、この機会に念仏のおしえをつぶしてやろう。
ということで、いよいよ立ちあがる気配があつたのである。

当時この比叡山は奈良の寺々に対して北嶺と称し、奈良のことを南都といつたので、興福寺、東大寺を中心とする南都の僧兵たちもこれに応じて、

法然のおしえをこの際一挙にたたきつぶしてやろう。
そうだ。

念仏などは人の心を惑わすものである。

ということ、これらの僧兵たちがいよいよ立ちあがることになつたのである。

比叡山には東塔、西塔、横川の三塔にわかれていて、その下に十六谷があり、その三塔に僧兵たちが一ぱいいたのである。

東塔の大講堂は、勅会(ちよくえ)の法要を営むところで、法華大会(ほっけだいえ)がここで修行されるのであるが、その大講堂の前を集合場として、三塔から僧兵たちがここに集まつたのである。

ちょうど、今という左翼運動のデモと同じことであつて、白はちまきに、たすきがけのいでたちで、衣の袖をまくしあ

げた僧兵たちが、いくさ姿いさましくここにあつまつての大きなデモである。

近頃都に法然なるものが新しいおしえをたてて、人々を迷わしている、けしからぬことである。

座長らしき僧兵の一人が気焰をあげると、わっーとばかりに合づちをうつ、僧兵たちの声は、杉木立をぬって、山にこだましたのである。

なんとかせねば、我々の天台のおしえがこの法然のおしえに食い荒らされてしまう。

念仏の停止運動をおこすべきである。一挙に都に出て法然のおしえをたたきつぶすか、それとも。

会話はいよいよ波乱を思わせたときに、天台座主（てんださす）である真性（しんしょう）の耳に入ったのである。

わが宗のものはけしからんことをたくらんでいる、これでは正しい法がひろまるものではない、あの僧兵たちの暴挙を中止させるべきである。

真性はそのことをただちにこの僧兵の会合につたえたのである。

やめろ、正しい法ならいかに阻止しようとしてひろまるものである。

真性のこのいましめには、僧兵たちもそれ以上の行動をと

るわけにはいかなくなって、比叡山から下ることを中止したのであるが、

まことに残念である。座主の耳に入ったのでは仕方がない。然しなんとかして法然のおしえを停止させたいが、よい方法はないか。

僧兵たちは歯を食いしばって考えた末、よしそれなら座主にわれわれの心をつたえようと、衆議一決して、

念仏は今後停止すべきである。

という決議文を座主の手もとにとどけたのである。

当時の比叡山の威光はたいへんなもので、この決議がなされたとなってくると、念仏の停止もやりかねないありさまとなったのである。もちろんこれは、ただちに法然上人のもとに申入れられるのは当然のことである。

もしそのようなことになっては、今の日本の大衆がかわいそうである。

法然上人も心をいためたのである。

なんとか正しい念仏のおしえを人につたえたいもの、念仏の名を借りて、道にはずれた行ないをしめてもらってはこまる。

この心がやがて、念仏を行ずる人たちの軌範を決める七箇条の制誡となつてあらわれるのである。

武偃和元



鶴田湛泉

(一) 東西講和

慶長十九年、冬の陣が起つて、家康は平野と住吉との中間に位する茶磨山に本陣をかまえて大坂城を望みながら、西軍にはげしい攻撃を加える一方、講和のための工作が本多正純の手によって行われたのはその年の十一月廿日からであつた。

関東と大坂方との和議が難航をつづけるが如く見えていたが、家康が和平の勅使の斡旋をこつた翌日、十二月十八日に東西の第一回の正式会談が行われ、次いでその翌十九日の第二回の会談に至つて交渉は急転直下まゝまつた。

大坂方の所領も秀頼、淀殿や城中の譜代ならびに新規召し抱えの牢人たちも何の咎もないこと、

ただし、織田有楽と、大野治長の二人は人質を出すこと、

両將軍の出馬のしるしとして城の総濠の堀を埋めるといふ三条件が関東側の申し出であつた。

秀頼もまた両御所（家康と秀忠）にたいし

て、今後とも謀叛や野心などおこさないと云つた意味の誓書を出すこととなつた。

こう云つた意味の両者の血判誓紙が、廿一日廿二日の両日に渡つた厳肅に取り替わされた。

廿一日家康は諸隊に講和の成立したことを知らせると共に、堀の埋め立ての奉行として松平忠明、本多忠政、本多康紀の三人に命じ直ちに工事に着手した。

翌日、奉行は諸藩の受持区域を定め、工事の割当てを行い、大名たちに一万石から三万石までの二十人を最低として、五十万から百万石の三千人を最高としておのおのの祿高に応じて人数を出させた。

ところが、大名たちはその割り当て以上の人数を競つて出し、ここに大がかりな埋平作業が初められた。

蟻のように集まつた人数が曳声を出して堤をうがち、土砂を運び堀を埋めた。夜もかり火をたいて徹夜で作業が強行された。

こうして二日目の廿三日の午前十時ごろには、城の南側の一帯が大概地ならしされてしまひ、昼には掃除まですませて休息のため各

自の陣所へ引きあげて行つた。

廿四日、家康は本多正純を召し、

「自分は掃落するゆゑ、物濠は勿論のこと、二の丸、三の丸まで奇手の人数で埋めてしまへ、その埋め立てようは、三才ぐらいの幼児でも自由に上り下りができるほど徹底的に！」笑いながら命じ、又、工事の惣奉行を呼びよせて、

「明年春まで在陣の覚悟をしておくように」

と謎のような意味ありげな言葉をのこし、本多正純、成瀬正成、完藤直次を留安居とし廿五日、茶磨山を引きあげ京都の二条城に入つた。

家康はこの壊平工事をよほど重要視したのか、これを監督させるため秀忠を岡山に留めしめた。

やがて外濠の埋め立てが終ると、三の丸、二の丸の堀、矢倉、石垣までどしどし潰し堀を埋め初めた、

埋め立てが内城までおよぶのを見て驚いたのは、大野治長、織田有楽、淀殿等である。

早速、大野治長が三奉行に約束は総濠であ

るのに、どうして内城まで及ぶのかと詰問した。

すると、彼等は、

「大御所の命でござる。総濠とは約束したではないか、総構と総濠とは、すべての堀のことで内外の区別はないはず」

と答えるのみであった。

彼等三奉行では埒が明かないと思つたのか、淀殿の使のお玉と治長が京都に行つて、更に本多正信や、板倉勝重らに連約を詰問したが誠意ある返答を何等得られないのみか、言をあいまいにし、最後は正信は仮病をつかい逢うとさえしなかつた。

大坂方では総濠とはいわゆる総構、総濠で外濠の一部の意味で、内城に及ぶのではないと辻褃にも信じていたらしい。

勿論、大坂方としても、この講和によって永久的な平和が保たれるとは思つてはいなかつたであらうが、すべては計算ずみの家康にしてやられた形であつた。

廿七日、秀忠は土井利勝を二条城へ使わしめて、家康に工事の進捗状況を報じた。

家康は元和元年正月三日に京都を立つた

が、途中は悠々と鷹を放つて鶴や雁の動物を楽しみながら関東に帰つて行つた。しかしその家康の跡を追うようにして秀忠の使者が、壊平作業の進行状況をたえず逐一報告しているのである。

正月八日、秀忠の使者が名古屋の家康をたずね、こゝ数日間の埋立工事の状況を報じた。

そして、二の丸の堀が広く四十間、或は五十間、六十間あり、何れも水底は三間、四間で浅いところでも二間もあるので、早速と作業が遂げ難きことを告げた。

十日には岡崎へ到着した家康のもとに永井尚政が使者として来て、先日と同様なことを伝え、十六、七日頃には工事も完了の予定であると報じた。

十二日、岡崎に逗留中の家康に安藤正次、佐久間政実兩名が来て、二の丸の堀は案外に広く深くて土手をこぼして埋め立てたが、土が三分の一にも足りぬので、千貫櫓をはじめ有楽、治長らの屋敷を引き崩して堀を埋め地形の高いところも崩して埋めた由を伝えた。

次いで十八日、使者の青山重政は、二の丸をことごとく壊平して工事も大方出来あがり

本城ばかり残すのみとなったと報じた。

廿一日に來た使者は、去る十九日午後四時、秀忠が大坂から伏見城に入ったことを告げ、塙平作業はまだ完全に成就せなため諸大名は人数を残し置かることを報じ、本多正純、安藤重信の兩名が目付けとして留つてい

る旨を告げた。
廿二日には、使者として成瀬正武が到着し廿四日、大坂から來た安藤直次に、先ず塙平のことをたずねた。

晦日、家康が中泉に來たとき使者の内藤正重が到着、大坂城の塙平作業が出来上つたので諸大名も廿四、五日に渡つてそれぞれ領国へ帰陳した旨を報じた。

二月朔日、中泉逗留中の家康に本多正純が訪ね、三の丸、二の丸の堀、門、櫓等まで悉く崩し埋めたと報じた。

七日、中泉にいる家康の許へ先月廿八日京を發つた秀忠が訪ねて來て、本多正信、正純父子、それに土井利勝を交えて密談が行われた。

しかしその内容は、当事者以外は誰れも知る由もなかった。

この密談が終つて後、十四日に家康は駿府に着き、秀忠は江戸に帰着したが、家康は帰途の道中では鷹狩をしながら悠々と楽しんでゐるが如くに見えたが、心は絶えず遙かな西にあって、大坂城の塙平作業に対して異常な関心を抱いていたのであつた。

塙平作業は傍若無人に約一ヶ月ほどかかつて二の丸までことごとく平地となつてしまひ本丸だけが残るという悲惨な状態となつた。

家康の黒衣の奉相とまでいわれる崇伝が、細川忠興への手紙に、大坂の城、堀埋まると本丸ばかりにて浅間しくなり見苦しき体にて御座候としたためたほどあわれなものとなつてしまつた。

福島正則は冬の陣の戦況にはそれほど関心を表わさなかつたが、講和が成立したことを耳にすると、「南無三、してやられたか」と思わず嘆声を放つたといわれているが、太閤子飼いの正則は家康の術策を見抜いたのではあるまいか。

講和の目的は、家康にとつてはこの塙平を行つたためであつたかも知れない。

大坂方にとって最も頼るべき無形な勢力

を、勞せずして、兵を損せずして打ちこわしてしまつたともいえる。

家康ともあろうものが、こんな奸策に近い方略を敢てしてまで二の丸まで埋めてしまわねばならない理由や必要があつたのは、一体何のためであらうか。それは大坂城が文字通り難攻不落であるということ、家康自身を身をもつて味わされたためではあるまいか。

業界一の銅瓦・銅板一般 模様葺・別製金具一式

私の先祖の宮及び寺の銅材一式手間代も寄進、神様仏様へ報恩の奉仕故御希望通り安く良く、他所にはできない何代も研究せる卓越せる最高技術最低価請負業者も悔なき様、御相談無料。

東京都文京区春日一の九の二八

銅瓦敷協会
相談役顧問
設計及監修

石黒工業

(電話812) 一五五一

年 新 賀 謹

浄土宗宗議會議長

稲岡 覺順

川口市北町二ノ五〇 西福寺

浄土宗宗議會議員

井原 文雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

浄土宗宗議會議員
常光寺住職

大谷 隆雄

浄土宗宗議會議員

栗本 俊道

東京文京区大塚五一二一〇 西信寺

浄土宗宗議會議員

赤平 昌導

青森県弘前市新寺町 貞昌寺

浄土宗宗議會議員

小林 忍戒

浄土宗宗議會議員

光運寺住職

飯田 信弘

四日市市中部三番

浄土宗宗議會議員
蓮勝寺住職

柴田 敏夫

横浜市港北区菊名町五三

浄土宗宗議會議員
浄土宗新聞主幹

白幡 憲佑

横浜市南区庚台久保山 光明寺

布教精神不惜身命

長明寺

小布施 弘学

長野市松代町東寺尾

明治天皇明石行在所
光明寺

山口 諦存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

函館市船見町一八〇一四
教学研究會

須藤 隆仙

天光 院

真野 竜海

年 新 賀 謹

京都家政短期大学

学長 三枝樹正道

華頂学園長

水野隆樹

京都市東山区 知恩院山内

鎮西学園

熊本市大江町九品寺一四〇

藤原弘道

京都東山 中学校長
高等学校長

神奈川県葉山町堀内
相福寺明照幼稚園

杉田義俊

明治は遠くなりました
今生かざるうれしさよ 合掌

一九六七・元旦
静岡市日吉二ノ二

華陽院住職

宗教法人日吉幼稚園長
社会福祉法人日吉町保育園長
同 北安東保育園長

堀田良謙

聖美幼稚園
日本童話協会

内山憲尚

品川区西品川五一〇〇二

北出立法

三重県多気郡大台町 慶雲寺

信ヶ原良文

京都 だん王法林寺

港区芝西久保巴町一〇六

野村桂造法衣店

電話(四三二)〇四二八番

京都市東山区古門前三吉町

安藤法衣仏具店

電話(五六)二〇六〇九二番

法然上人鑽仰会

佐藤密雄 佐藤良智 中瀬康隆 村瀬秀雄 村中 佐藤 竹中 信昭彦 宮林 昭彦 安居 香山 佐藤 行信 水谷 哲雄 佐藤 成順 長谷川 宣丈

仏教の常識

一蓮托生（いちれんたくしやう）

この言葉も、仏教からでた日常語であるが、最近ではあまり一般に知られていないようである。一般的には、運命をともにするというふうに使われている。本来の意味は、極楽浄土に往生して、おなじ蓮台に生まれる、ということである。

わたしたち人間仲間のなかで、男女の区別、顔かたちのちがいをみても、一人として寸分たがわぬ同じひとは存在しない。たとえ容貌は似ていても、心もちや考えかたに隔たりがある。そして、身分や財産や生活程度、さらに教養など千差万別である。

このような人間が、おなじ社会のなかで共同生活をいとなむのであるから、人間社会はまことにややこしい。すべて差別観に立つて、ものごとを考え、処理しようとするのであるから、あらそいはたえない。ベトナムの問題にしても、それぞれ国の利益を中心に考えて、一步も引くことをしらない。国の政治にしても、党利党略を中心にはこぶ。家庭生活でも、自己をまもるために我利々々になる。

すべて、差別観に立って、自己主張のみしている場合は、あらそいも断えなければ、平和はこない。差別をこえた平等の立場でものを考えてみることである。

いいかえるならば、相手の立場に当ってものを考えることである。

「うらみはうらみをもつてしては、ついに息むことができない。忍を行じて怨みを息むること、これが永恒にかわらざる如来の法である」

この立場は、慈悲のところがはたらかねばえられない。

うらみをもつ敵も、同じ人間として、いな生あるものすべてが仲間として、あたかくつつむことのできるのは、凡夫には仲々えがたい境地である。

それは、あみだ仏の本願のしんせつにあずかって、おまかせした心地である。相対をこえた絶対の立場への帰入である。

ここに念仏の味いがある。当り前のことではあるが新年によせて一考すべきことではある。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

（送料 六円）

会費一力年 金七二〇円

（送料 不要）

浄土 正月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年十二月二十五日 印刷

昭和四十二年一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四番

振替東京八二一七番

感量した安定
像來如師藥

藏寺興元



心の悩みばかりではなく、肉体の苦痛をいやしてくれろ、とにうとかった古代人にとって、薬師如来ほど切実にありがたいみほとけはほかにはなかったことであろう。端的に一般庶民にこれほど親しかったみほとけは、ほかには考えられそうもない。そのせいか奈良時代後期から急に薬師信仰はたかまり、ことに平安時代以後、薬壺を持った薬師如来が大いに拝まれている。

そのような、みほとけは量感に安定さがなければならぬ。堂々とした体軀、それでいて安心できるための親しさが要求されてくる。その代表として、この元興寺に安置されて

いる薬師さまを誰しも第一に挙げるほどに、実に立派なお姿をしておられる。螺のあらいのも均勢をとる上に役立っているし、強靱なお体とともに、流れるような衣のひだは、しっかりと大地を踏みしめている両足をことのほか浮き立たせていて美事というほかはない。それでいて、お顔には苦痛になやめる人々を偲んでか、愁えさえ浮かべているように見えるのはひが眼というべきであろうか。堂々とした姿は弱い体の持主に対するすばらしい願いであり、作者の演出でもある。

(石上善忠)

年 新 賀 謹

總本山 知恩院

門主 岸 信宏

執事長 鶴 飼隆玄

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五ノ三八

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎尾 弁匡

執事長 里 見達雄

大本山 光明寺

法主 大野法道

執事長 丸 地 弁 信

電話〇四六七(2)〇六〇三

大本山 善光寺大本願

法主 一条智光

副住職 鷹司誓玉

執事 早川利雄

大本山百万遍

知恩寺

浄土宗宗務支所

支所長 新谷寛心
総務局長

鎌倉市長谷五五〇

大仏殿 高德院

電話 鎌倉七〇三番

東京都文京区小石川三ノ一四ノ六

檀林 伝通院

東京都港区赤坂四丁目

浄土寺住職

阿川貫達

里見達雄

東京都大田区田園調布七ノ三〇ノ二

照善寺 田丸徳成

電話(七二二)三二四八番

静岡県富士宮市大宮

大頂寺 石井真峯

電話(〇五四四二)三四六五番